

資料紹介

「随筆」資料解題

星 瑞 穂

はじめに

本稿は国立公文書館（以下「当館」という。）所蔵の資料のうち、随筆作品の書誌解題である。広く一般の利用に供するため、作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「国文（随筆）」の項目に挙げられている資料から、該当の資料を抽出して調査した。旧蔵者は紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所など多岐に及ぶ。

なお明治期に刊行された活字版および昭和期に刊行された影印版は、対象から除外した。

丁付については、一丁目オモテ・二丁目ウラをそれぞれ「一オ」「二ウ」と表記し、丁付が進むごと数字を加算していく。

【一】「清少納言枕草紙」 写年不明 三冊

和学講談所旧蔵「請求番号：二〇三・〇〇八四」

本資料は清少納言による随筆『枕草子』の写本。袋綴。三冊。

長保二年頃、段階的な加筆を経ながら成立。作者が仕えた中宮定子の後

宮での体験や見聞、自然・人事に対する感想などを、長短三百余段に記したものの。

内容は次のように分類できる。(一)類聚章段。「…は」式の章段と「…もの」式の章段など、次々ともはや事象を列挙していく章段。(二)日記的章段。「上にさぶらふ御猫は」など、定子後宮の様子が、宮仕え中の作者の視点を通して具体的に語られる章段。(三)随想章段。「春はあけぼの」など、随想風・スケッチ風の章段。ただし、厳密には区別がつかかねるものも多い。

伝本によつて、まず雑纂本・類纂本の二種に大別される。雑纂本はさらに三巻本・能因本に分けられ、三巻本は約三〇〇、能因本は約三二〇の章段を持つ。「春はあけぼの」で始まり、跋文で終わるのが特徴。雑然とした配列も特筆すべきである。三巻本は本文の状況からさらに一類・二類に分類される。本資料はこのうち、二類に分別されるものである。一類本に比べ、本文を完備しているものの独自の校訂がなされているのが特徴（石田穂二「枕草子」『日本古典文学大辞典』）。

本資料の場合は「春はあけぼの」ではなく「おほきにてよきもの」から始まる。「春はあけぼの」は①六八才から丁を改めて始まる。また朱入れで校訂が施されている点の特徴。筆跡は複数見られ、合写本である。また三冊目の地に欠けがあり、①七五ウの頭注もまた欠けていることから、三

冊とも天地を切断して改装していると推定される。一冊目の場合は、ほかの二冊よりも一回り小さく、ノドも見えにくい箇所が散見され、無理な改装がなされたと言えるのではないか。

【書誌】

外題・左肩打付墨書「清少納言枕草子 上(中・下)」
内題・なし

表紙・香色表紙(①三三〇糎×一五・八糎、②③三三・五糎×一六・五糎)
見返し・裏見返し右下に「塙保己一蔵書」と墨書あり

遊紙・なし
料紙・楮紙

行数・每半葉二一行
字面高さ・一八・〇糎

匡郭・無辺無界
墨付丁数・①一四二丁、②六七丁、③四四丁

印記・①一才「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」「日本政府図書」、七四ウ「内閣文庫」、一四一ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

②一才「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」「日本政府図書」、二七ウ「内閣文庫」、六七ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

③一才「書籍館印」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」、二三ウ「内閣文庫」、四四ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がなく、写年・書写者ともに不明。二冊目裏見返しに「塙保己一蔵書」と墨書があるが、蔵書印も見られず、奥書としては場所も不

自然であり、信憑性に欠く。写年は江戸時代中期以降か。

【二】「枕草子」〔慶長〕年間刊 五冊

〔紅葉山文庫旧蔵〕「請求番号：特一一六・〇〇〇七」

本資料は「第一種本」と称される慶長古活字版である。『枕草子』の版本としては最古のもので、これをもとに慶元古活字版、慶安二年整版が刊行されたと考えられ、流布本の位置を占めるに至る(川瀬一馬『増補古活字版の研究』日本古典籍商協会、一九六七年)。

各冊一丁目に紅葉山文庫旧蔵書に捺される「秘閣図書之章」の印があるが、五冊とも上下逆さに捺されている。「秘閣図書之章」は明治に入ってから紅葉山文庫旧蔵書に捺されたもので、その際に誤りが生じたか。一冊目の水損が目立つものの、概ね状態は良い。

【書誌】

外題・「枕草子 一(五)」左肩香色料紙題簽(二五・〇糎×四・〇糎)
内題・なし

表紙・栗皮色表紙(二八・〇糎×二〇・二糎)
見返し・「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・なし
料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行
字面高さ・二三・〇糎

匡郭・無辺無界
墨付丁数・①八〇丁、②八三丁、③八二丁、④五八丁、⑤四〇丁

印記・①一才「秘閣図書之章」「内閣文庫」「日本政府図書」、八〇ウ「内閣文庫」

②一才「秘閣図書之章」「内閣文庫」「日本政府図書」、八三ウ「内閣文庫」「日本政府図書」

③一才「秘閣図書之章」「内閣文庫」「日本政府図書」、八二ウ「内閣文庫」

④一才「秘閣図書之章」「内閣文庫」「日本政府図書」、五八ウ「内閣文庫」

⑤一才「秘閣図書之章」「内閣文庫」「日本政府図書」、四〇ウ「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記がないため、刊行者は不明。

【三】清少納言「寛永」年間刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号：特一一六・〇〇〇五」

本資料は「第三種本」と称される寛永古活字版である。「第一種本」に比べて毎半葉二三行、毎行約二二字と字と活字が小さい点が特徴。本資料の場合その「第三種本」のうち国立国会図書館所蔵本等と同じ「イ種本」に分類されるもの（川瀬一馬、前掲書。）

本資料の場合、内題「清少納言」が巻末にあり、目録名はこちらを探る。しかし古写本の場合は外題にあるように「清少納言枕草紙」という書名が多い。

捺されている蔵書印から、本資料は文政二二年に昌平坂学問所に収蔵さ

れたことがわかる。

【書誌】

外題・「清少納言枕草紙」左肩打付墨書

内題・「清少納言」

表紙・朱色雷文繫地唐花文様艶出表紙（二七・五糎×一九・〇糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・毎半葉二三行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①五一丁、②五三丁、③五三丁、④三七丁、⑤二五丁

印記・各冊表紙右肩「昌平坂学問所」

①一才「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」、五一ウ「日本政府図書」「昌平坂学問所」「内閣文庫」「文政己丑」

②一才「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」、五三ウ「日本政府図書」「昌平坂学問所」「内閣文庫」「文政己丑」

③一才「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」、五三才「内閣文庫」、五四ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

④一才「日本政府図書」「内閣文庫」、三七ウ「日本政府図書」「昌平坂学問所」「内閣文庫」「文政己丑」

⑤一才「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」、二四ウ「日本政府図書」「昌平坂学問所」「内閣文庫」「文政己丑」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記がないため、刊行者は不明。

【四】清少納言〔寛永〕年間刊 四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：特一一六・〇〇〇六」

本資料は「第三種本」と称される寛永古活字版のうち、活字の違いから「八種本」に分類されるものである（川瀬一馬、前掲書）。巻二を欠くため、全四冊。

多くはないが、朱で校訂されている部分がある。状態は良いが、袋が開いてしまっている箇所も見受けられる。

表紙は前掲資料と同じいわゆる丹表紙であるが、文様は異なっている。

【書誌】

外題・「清少納言枕草紙 一（三〇五）」左肩打付墨書

内題・「清少納言」

表紙・朱色雷文繫艶出表紙（二七・五糎×一八・五糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二三行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①五二丁、②五三丁、③三七丁、④二四丁

印記・各冊一オ「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

「内閣文庫」、各冊末尾「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記がないため、刊行者については不明。④二四ウに墨書「心光院殿頼誉可信居士」とある。和学講談所以前の旧蔵者のものと推定されるが、伝未詳。

【五】枕草子 慶安二年刊 七冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：特〇二七・〇〇一六」

本資料は慶安二年に整版で刊行された『枕草子』。整版としては最初期のもので、注釈書を除けば広く流布したといえる。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵書と見られ、保存状態が極めて良好な点特徴。ただし、表紙および題簽は後補と見られる。

【書誌】

外題・「枕草子 一（〇七）」左肩四周双辺刷題簽（一八・三糎×二・三糎）

内題・「枕草子」

表紙・縹色表紙（二七・〇糎×一九・三糎）

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・各冊一丁

料紙・楮紙

行数・每半葉二一行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①二九丁、②四九丁、③三七丁、④三二丁、⑤三二丁、⑥四五丁、⑦二九丁

印記・①一オ・三九ウ「日本政府図書」、④一オ・三二ウ「日本政府図書」、

⑤一オ・三四ウ「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

⑦二九ウに以下のとおり刊記あり。
「慶安二曆／初夏上旬／二条通／澤田庄左衛門刊板」

【六】清少納言枕草子抄 延宝二年刊 一四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇〇九四」

本資料は延宝二年刊行、加藤盤齋の手による『枕草子』の注釈書である。

『枕草子』全巻に対する注釈書としては最古のもの。儒教的な志向が強く、『枕草子』から教訓を引き出そうとする点が特徴（石田穰「清少納言枕草子抄」『日本古典文学大辞典』）。

加藤盤齋は通称を新太郎、貞徳に和歌・歌学を学んだ和学者である。本資料のほかにも『土佐日記見聞抄』『方丈記抄』『徒然草抄』などの著作があり、「古典の啓蒙普及に努めた点に功績があった」と評される（野村貴次「加藤盤齋」『日本古典文学大辞典』）。本資料の刊行時期でもある延宝二年に没したとされる。

本資料は蔵書印から見て和学講談所の旧蔵。本来は十五卷十五冊だが、本資料の場合は巻四を欠くため、全一四冊。

【書誌】

外題・①「清少納言枕双紙抄 一」四周双边刷題簽（一七・〇糎×三・二糎）に墨書、②～④⑬一部欠、⑤～⑩⑫「清少納言枕双子抄 六（十一・十三）」左肩四周双边刷題簽（二八・五糎×三・七糎）、⑪欠、⑭「清少納言枕雙紙抄」左肩四周双边刷題簽（二八・八糎×三・三糎）に墨書

内題・「清少納言枕草子抄」

表紙・紺色表紙（二七・〇糎×一九・三糎）、⑭裏表紙のみ横刷毛目表紙

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一五行

字面高さ・二三・三糎（頭注六・〇糎、本文一六・三糎）

匡郭・四周单边（二二・三×一七・二糎）、無界

墨付丁数・①三三丁、②六五丁、③四一丁、④四〇丁、⑤四三丁、⑥二九丁、⑦三四丁、⑧三三丁、⑨三〇丁、⑩四三丁、⑪二八丁、⑫二九丁、⑬三九丁、⑭三三丁

印記各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」不明陽刻印（二・三糎×二・三糎）

【刊年・刊行者】

⑭三ウに以下のとおり刊記あり。

「延宝二年五月日 油小路下立売下ル町 田中権兵衛蔵版」

【七】春曙抄 延宝二年改刊・享保一四刊 一三冊

大学校・大学旧蔵 「請求番号：二〇三・〇〇八八」

本資料は北村季吟による『枕草子』の注釈書『枕草子春曙抄』一二巻と、壺井義知による有職故実書『枕草子装束抄』一卷を併せたもの。『枕草子春曙抄』は跋文に延宝二年の年記があり、『枕草子装束抄』には享保一四年の刊記がある。

『春曙抄』は江戸時代を通して最も流布した『枕草子』の注釈書である。決定版とも言える位置を占め、後世に与えた影響も大きい。

前掲の『清少納言枕草子抄』に比べても、内容は穏当・妥当といえる（石田穰「枕草子春曙抄」『日本古典文学大辞典』）。

著者の季吟もまた加藤盤齋に同じく貞徳の門人で、和歌・歌学に親しんだ。和学者として遺した功績は顕著で、『源氏物語』の注釈書『湖月抄』もまた江戸時代を通して流布した。

『枕草子装束抄』の著者である壺井義知は故実家としての著作が多い。『源氏官職故実秘抄』『装束要領抄』などを挙げる事ができる。はじめ四辻家に仕えたが、ほぼ独学で一家を開いた。享保一〇年には幕府にも召し出されている。

②～⑬『春曙抄』表紙には朱書で章段名が記されている。

本資料は「大学蔵書」の印から大学校・大学の旧蔵書であることがわかるが、それ以前の旧蔵者のものと思われる印記「岡見氏蔵書」などが見られる。

【書誌】

外題・①「枕草子装束抄 目録」左肩四周单边刷題簽（一八・二糎×四・

〇糎）、②④⑨⑪⑫⑬「枕草子春曙抄 一（三・八・十～十二終）」四周单边

刷題簽（一八・五糎×四・〇糎）、②④⑤⑦一部欠

内題・①「清少納言枕草子装束提要抄」、②「春曙抄」

表紙・紺色表紙（二六・八糎×一八・五糎）

見返し・①章段名・凡例（朱書）、②～⑬章段名（朱書）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・①每半葉二行、②每半葉二行

字面高さ・①二・二〇糎、②二・二糎

匡郭・①四周单边（二・三・〇糎×一七・〇糎）、無界、②四周单边（二・二・

糎×一七・〇糎）、無界

墨付丁数・①二八丁、②三二丁、③三九丁、④三三丁、⑤三二丁、⑥二八丁、

⑦二四丁、⑧二八丁、⑨二六丁、⑩三三丁、⑪二八丁、⑫二六丁、⑬二四

丁

印記・①一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」「岡見氏蔵書」不

明陽刻方形印（二・五糎）、一八ウ「岡見氏蔵書」、②一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、③一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、二九ウ「岡見氏蔵書」、④一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、三二ウ「岡見氏蔵書」、⑤一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、三二ウ「岡見氏蔵書」、⑥一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、二八ウ「岡見氏蔵書」、⑦一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、二八ウ「岡見氏蔵書」、⑧一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、二八ウ「岡見氏蔵書」、⑨一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、二六ウ「岡見氏蔵書」、⑩一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印、⑪一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印「岡見氏蔵書」、⑫一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印「岡見氏蔵書」、⑬一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」不明陽刻方形印「岡見氏蔵書」

【刊年・刊行者】

『装束抄』『春曙抄』それぞれに以下のとおり年記あり。

①一八ウ「皇都 四条通京極西入町／享保十四年己酉卯月下旬 上坂勘兵衛源兼勝発梓」一九ウ「享保己酉歲初夏／門人多田義俊書、⑬二四ウ「延宝二年甲寅七月十七日」

【八】春曙抄 延宝二年跋刊・享保四年刊 六冊

書籍館旧蔵「請求番号：二〇三・〇〇九三二

本資料は前掲資料と同じ『装束抄』『春曙抄』一三巻であるが、合冊さ

れているため全部で六冊。なお一冊目の一才〜一八ウが『装束抄』に当たる。『装束抄』の冒頭以外、『春曙抄』の冒頭右肩に壺印が捺されている。もとは旧蔵者の異なる取り合わせ本だろうか。

【書誌】

外題・「春曙抄 一（〜六）」左肩四周双边刷題簽（一八・五糎×三・八糎）に墨書

内題・①「清少納言枕草子装束提要抄」、②③⑥「春曙抄」

表紙・香色表紙（二五・五糎×一八・八糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周单边（二二・〇糎×一七・〇糎）

墨付丁数・①七二丁、②六二丁、③五二丁、④五三丁、⑤五八丁、⑥

五二丁

印記・①一才「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」、一九才不明陽刻壺印、四五才不明陽刻壺印、七一ウ「日

本政府図書」「内閣文庫」

②一才不明陽刻壺印「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」「三二才不明陽刻壺印、六二ウ「日本政府図書」

「内閣文庫」

③一才不明陽刻壺印「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」「二九才不明陽刻壺印、五二ウ「日本政府図書」

「内閣文庫」

④一才不明陽刻壺印「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」

「内閣文庫」

「内閣文庫」

草文庫」「内閣文庫」二九才不明陽刻壺印、五四ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

⑤一才不明陽刻壺印「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」五八ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

⑥一才不明陽刻壺印「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」五一ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

『装束抄』『春曙抄』それぞれに以下のとおり年記あり。

①一八ウ「皇都 四条通京極西入町／享保十四年己酉卯月下旬 上坂勘

兵衛源兼勝発梓」一九ウ「享保己酉歲初夏／門人多田義俊書」、⑥五一ウ「延

宝二年甲寅七月十七日」

【九】春曙抄 延宝二年改刊・享保四年刊（寛政六年後印） 一三冊

内務省旧蔵 「請求番号…二〇三・〇〇九五」

本資料は前掲資料に同じ延宝二年改刊『春曙抄』に享保四年刊『装束抄』を附したものであるが、寛政六年の後印である。

内務省以前の旧蔵者のはっきりしない。各冊一才右下に「貞堅」の印が見え、これが旧蔵者のものと推定される。

寛政五年版は江戸の須原屋伊人と高橋与物治から刊行されており、一三冊目二五才〜二八ウには須原屋の出版目録が掲載されている。

【書誌】

外題・①「枕草子装束抄」左肩四周双边刷題簽（一八・三糎×四・三糎）、

②③④⑬「枕草子春曙抄 一（〜十三終）」左肩四周双边刷題簽（一八・三糎×四・

三糎）

「内閣文庫」

「内閣文庫」

「内閣文庫」

「内閣文庫」

「内閣文庫」

「内閣文庫」

(二纏)

内題・①「清少納言枕草子装束提要抄」、②③⑥「春曙抄」

表紙・縹色表紙(二六・五纏×一九・三纏)

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二二・〇纏

匡郭・四周单边(二二・〇纏×一七・〇纏)

墨付丁数・①一八丁、②二二丁、③二八丁、④三二丁、⑤三二丁、⑥一八丁、

⑦二四丁、⑧二八丁、⑨二六丁、⑩三〇丁、⑪二八丁、⑫二六丁、⑬二九

丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「太政官文庫」「貞堅、

各冊末尾「太政官文庫」「大日本帝国図書印」

【刊年・刊行者】

刊記および年記は以下のとおり記載がある。

①一七ウ「寛政元己戌年初冬」(※寛政元年は正しくは酉年)

一八ウ「享保己酉歲初夏／門人多田義俊書」

⑬二九才「寛政六甲寅七月購版／江戸書林／東叡山池之端仲町／須原屋

伊八／同町／高橋与惣治」

【二〇】春曙抄 延宝二年跋刊 六冊

大学・大学校旧蔵 「請求番号：二〇三・〇〇八九」

本資料は延宝二年跋刊の『春曙抄』だが、『枕草紙装束抄』を欠く。「大

学蔵書」「浅草文庫」の印から、大学・大学校・浅草文庫旧蔵であることがわかるが、それ以前の旧蔵者は不明。

【書誌】

外題・①欠、②③⑥「枕草子春曙抄 三之四(十一之十二)」

内題・①春曙抄

表紙・紺色表紙(二七・〇纏×一九・三纏)

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二二・三纏

匡郭・四周单边(二二・三纏×一七・三纏)

墨付丁数・①五九丁、②六二丁、③五二丁、④五四丁、⑤五八丁、⑥

五〇丁

印記・各冊一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

⑥五〇ウ「延宝二年甲寅七月七日」の年記あり。

【二一】春曙抄 延宝二年跋刊 六冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：二〇三・〇〇九〇」

本資料は前掲資料と同じ延宝二年跋刊の『春曙抄』だが、極めて状態が良い点が特徴。献上本として紅葉山文庫に収められたものか。

【書誌】

外題・枕草子春曙抄 二二(十一之十二)左肩四周单边刷題簽(一九・〇

糴×三・五糴)

内題・「春曙抄」

表紙・縹色表紙(二八・八糴×二〇・五糴)

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・一丁

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二二・五糴

匡郭・四周単辺(二二・五糴×一七・五糴)

墨付丁数・①五九丁、②六二丁、③五二丁、④五四丁、⑤五八丁、⑥

五〇丁

印記・各冊一才「秘閣図書之章」「日本政府図書、各冊末尾「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

⑥五〇ウ「延宝二年甲寅七月七日」の年記あり。

【一二】方丈記 刊年不明 一冊

林家旧蔵「請求番号：二〇三・〇一〇七」

鴨長明の手による随筆『方丈記』の刊年不明版。林家旧蔵。

『方丈記』は本文末の記述によれば建暦三年三月三十日に成立。隠者文学の最高峰として、古来『徒然草』と共に中世随筆の双璧とされる(佐竹昭広「方丈記」『日本古典文学大辞典』)。

諸本としては広本系・略本系に大別される。本資料の場合は広本系のうち、流布本とされる系統。なお江戸時代に刊行された版本は嵯峨本も含めすべ

てこの系統である。

【書誌】

外題・「鴨長明方丈記」四周双辺刷題簽(一五・〇糴×二・八糴)

内題・なし(※版心に「方丈記」とあり、目録書名はこれに基づく)

表紙・紺色表紙(二七・三糴×一八・二糴)

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二〇・三糴

匡郭・四周単辺(二〇・三糴×一六・二糴)

墨付丁数・二五丁

印記・一才「林氏蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「弘文学士院」、二五ウ「昌

平坂学問所」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記がないため、刊年・刊行者については不明。本書に用いられている「弘文学士院」は林鶯峰の蔵書印なので、鶯峰が没する延宝八年以前の刊行と推定するのが妥当だろう。

【二三】「方丈記」 写年不明 一冊

林羅山旧蔵「請求番号：二〇三・〇一〇八」

本資料は鴨長明の手による『方丈記』の写本。林羅山の蔵書印「江雲滑樹」が見られることから、江戸時代初期の写であることが推定される。

【書誌】

外題・「鴨長明／方丈記」 左肩打付墨書

内題・なし

表紙・代赭色表紙（二七・六糎×一九・二糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二〇・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・二五丁

印記・二才「林氏藏書」「日本政府図書」「淺草文庫」「江雲澗樹」、二五ウ「昌平坂学問所」表紙右肩「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

奥書がないため、写年・書写者については不明。江戸時代初期の書であることは疑いない。

【一四】鴨長明方丈記之鈔 写年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：二〇三・〇一〇九」

本資料は『方丈記』の注釈書で、明暦四年刊行の絵入り版から書写したものである。版元は長谷川市良兵衛、伝未詳。本資料の場合、書写されたのは本文部分のみで、絵はない。

一般的な書名としては『方丈記之抄』として知られる。改題本としては天保四年に刊行された『方丈記新抄』が知られる。

【書誌】

外題・「長明方丈記 全」 左肩四周双辺刷題簽（二八・二糎×四・〇糎）

内題・「鴨長明方丈記之鈔」

表紙・縹色表紙（二七・三糎×一九・〇糎）

見返し・「日本政府図書」 蔵書票貼付

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二一行

字面高さ・序二〇・〇糎、本文二三・五糎、頭注六・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・二八丁

印記・一ウ「内閣文庫」、一四ウ「内閣文庫」、二八才「内閣文庫」

【写年・書写者】

奥書がないため、本資料の写年についてははっきりしない。序文には「明暦三丁酉歲十一月日」の年記がある。

【一五】鴨長明方丈記之鈔 安永五年写 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇一〇六」

本資料は前掲資料に同じ『方丈記』の注釈書で、明暦四年版本からの写しである。蔵書印から判断するに、和学講談所の旧蔵であることは間違いないが、一才右肩に蔵書印を切り取った形跡があり、和学講談所以前の所蔵者の印があった可能性が高い。奥書によれば多賀谷氏であるが、未詳。

【書誌】

外題・「鴨長明方丈記抄」左肩無地料紙題簽に墨書
内題・「鴨長明方丈記之鈔」

表紙・香色表紙（三・八糎×二六・二糎）

遊紙・一丁

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・一八・〇糎（本文一〇・〇糎、頭注七・五糎）

匡郭・無辺無界

墨付丁数・二九丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」、一七ウ「内閣文庫」、二九ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

二九才に以下のとおり奥書あり。

「右一巻先年浅岡何某之本を以於／江府写置処去辰年雨風のために／損文字不相分により又是浅岡得書文再写置之畢／安永五年申年五月十九莫／多賀谷蔵書」

【一六】「徒然草」慶長年間刊 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：特〇二七・〇〇一八」

兼好法師の手による『徒然草』の嵯峨本第二種である（川瀬一馬、前掲書）。状態悪化のため、閲覧は不可能と判断し、今回は調査対象から除外した。

【一七】徒然草 慶長年間刊 二冊

旧蔵者不明 「請求番号：特〇六〇・〇〇二二」

本資料は『徒然草』の嵯峨本第四種（川瀬一馬、前掲書）。

『徒然草』は『方丈記』に並ぶ中世隠者文学の最高峰である。『枕草子』を意識したと思われる雑纂形式で、長短さまざまな各段で述べられる内容は多岐に亘る。その内容が高く評価され流布するようになったのは江戸時代からで、本資料をはじめとする古活字版はその初期の刊行。

なお、目録には著者名を「吉田兼好」とするが、近年の研究において兼好法師は吉田氏ではないと判断されているため、現在ではこの呼び名は適当ではない（小川剛生『兼好法師——徒然草に記されなかった真実』中央公論新社、二〇一七年）。

本資料の場合、第一冊目の一丁目が著しく損傷しており、表紙は後補と考えられ、仮綴じの状態である。内閣文庫のものも含め、印記が一切見当たらず、旧蔵者の手がかりはない。

【書誌】

外題・なし

内題・なし

表紙・代赭色表紙（二八・〇糎×二一・〇糎）

遊紙・①②前後二丁

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①九四丁、②七七丁

印記・なし

【刊年・刊行者】

本資料に刊記はないため、刊年・刊行者ともに不明。活字や大きさから見て、慶長年間の出版であると推定される。

【一八】〔徒然草〕 慶長年間刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：特一一九・〇〇〇四」

前掲資料と同じく嵯峨本第四種に分類される古活字版（川瀬一馬、前掲書）である。

前掲資料よりはやや状態が良いが、刊行の前後は不明である。

各冊末尾に「昌平坂学問所」の墨印と「文化乙亥」の朱印があることから、文化十二年に昌平坂学問所に新収されたことがわかる。

【書誌】

外題・「徒然草 上(下)」左肩打付朱書

内題・なし

表紙・紺色表紙（二八・〇糶×二二・四糶

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糶

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①九四丁、②七七丁

印記・①一才「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」、九四ウ「昌平

坂学問所」「文化乙亥」、②一才「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」、七七ウ「昌平坂学問所」「文化乙亥」

【刊年・刊行者】

本資料に刊記はないため、刊年・刊行者ともに不明。活字や大きさから見て、慶長年間の出版であると推定される。

【一九】〔徒然草〕 慶長一八年跋刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：特〇六一・〇〇〇九」

本資料は慶長一八年に刊行された古活字版で、烏丸光広による奥書を持つことから通称を「烏丸本」という。『徒然草』が江戸時代に広く流布するきっかけとなったのがこの「烏丸本」の刊行で、現在に伝わる『徒然草』の本文のほとんどがこの「烏丸本」の系統に属する。そのため別に「流布本」とも呼ぶ。

烏丸光広は江戸初期の公卿で、細川幽斎の門下において古今伝授を受けた歌人であり歌学者。書画・茶道にも通じた多才の人と伝わる。なお当館の場合、自筆と伝わる「百人一首」が収蔵されている（請求番号：特〇三三・〇〇〇六）。

奥書によれば、本資料は光広が校訂を加えて刊行されたものである。

各冊末尾には「昌平坂学問所」の墨印と「文政丙戌」の朱印があることから、文政九年に昌平坂学問所に新収されたことがわかる。

第一冊目には朱による書入れが目立つ。

【書誌】

外題・「徒然草 上(下)」左肩四周双边刷題簽に墨書（一九・六糶×三・

【五種】

内題・なし

表紙・布目型押代楮色表紙（二八・〇糎×二〇・〇糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・毎半葉一〇行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①九八丁、②九七丁

印記・①一才「大学蔵書」「日本政府図書」、九八才「昌平坂学問所」「文政丙戌」

②一才「大学蔵書」「日本政府図書」、九七ウ「昌平坂学問所」「文政丙戌」

【刊年・刊行者】

②九七ウに以下のとおり年記あり。

「慶長癸丑仲秋日 黄門光広」

【二〇】「徒然草」 慶長一八年跋刊 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：特一一九・〇〇〇三」

本資料は前掲資料に同じ「烏丸本」の『徒然草』である。前掲資料に比べ、書入れは少ないものの、全体的にヤケがある。刊行の前後についてはつきりしない。

第一冊目の表紙の破損が著しい。元表紙と思われる鉄色の紙片がわずかに残っている。大部分を覆う香色の表紙は修理の際に補されたものか。

【書誌】

外題・「つれくくさ」 左肩四周双边刷題簽（一六・八糎×三・八糎）に墨

書

内題・なし

表紙・①鉄色雷文繫艶出表紙（※大部分を破損）（二八・三糎×二〇・二糎）、

②香色表紙（同）

遊紙・①二丁

料紙・楮紙

行数・毎半葉一〇行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①九八丁、②九七丁

印記・①一才「書籍館印」「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「和

学講談所」、九八才「内閣文庫」

②一才「書籍館印」「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「和

学講談所」、九七ウ「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

②九七ウに以下のとおり年記あり。

「慶長癸丑仲秋日 黄門光広」

【二一】徒然草 文化二二年跋刊 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号：二〇三・〇一一」

本資料は幕臣の屋代弘賢による校訂を経た『徒然草』の版本。

紅葉山文庫の旧蔵のため、全体的に状態は良い。各冊一丁目に紅葉山文庫旧蔵を示す「秘閣圖書之章」の印が捺されているが、上下逆様の状態である。明治期に入ってからまとめて捺した際、生じたミスであろう。

跋文には「源弘賢」（屋代弘賢のこと）の署名が見え、自筆版下であることを想像させる。

屋代弘賢は幕臣で国学者。柴野栗山や塙保己一らに師事。『寛政重修諸家譜』『国鑑』『藩翰譜続編』など幕府編修事業に参加し、文化七年には『古今要覧』編纂の命を受け、亡くなるまで編纂を続けた。蔵書家としても知られ、上野不忍池のほとりに書庫を構えたことから、旧蔵書には「不忍文庫」の印がある。

【書誌】

外題・「徒然草 上(下)」左肩四周双边刷懸簽(一八・四糎×四・〇糎)
内題・なし

表紙・朱色表紙(二六・二糎×一九・〇糎)

遊紙・①②冒頭一丁

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二〇・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①八六丁、②七七丁

印記・①②一才「秘閣圖書之章」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

②七七才に以下のとおり年記あり。

「文化十二年二月二日書写終切 源弘賢」

【二二】「徒然草寿命院抄」 慶長九年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号」特一一九・〇〇〇二

本資料は『徒然草』の注釈書『徒然草寿命院抄』の初版に相当する、慶長九年刊古活字版。

「序」部分や、各章段に数字を附し、区分を明確にした点に本書の特徴がある。

作者は寿命院立安(秦宗巴)で、書名はこの名に由来する。豊臣秀次に仕え、山科言経との交流が本書の成立に深く関わっていたことが指摘されている(小秋元段「宗巴と言経」、『徒然草寿命院抄』成立過程考)『法政大学文学部紀要』七五号、二〇一七年)。

安土桃山時代末期〜江戸時代初期には『徒然草』が高く評価されるようになり、そういった機運の中で本書は出版された。『徒然草』の注釈書の嚆矢である。用いられている本文は「流布本(烏丸本)」のもので、これに基づき、各章段毎に大意・注釈(引用元や語釈など)を載せる(森川昭「徒然草寿命院抄」『日本古典文学大辞典』)。

本資料が出版されてもなお、異同の少ない写本が現れている点から見て、増訂・改訂が繰り返されていたとみられる(小秋元段『徒然草寿命院抄』写本考)(佐藤道生・高田信敬・中川博夫編『これからの国文学研究のために——池田利夫追悼論集』笠間書院、二〇一四年)。

本資料は昌平坂学問所の旧蔵書で、「文政庚寅」の朱印が見られることから、文政一三年に新収されたものであることがわかる。ただし、各冊冒頭右下に、蔵書印を切り取ったと思われる箇所がある。本来はこの場所に、昌平坂学問所以前の旧蔵者の印があったと推定される。

【書誌】

外題①「徒然草抄」左肩打付朱書、②「寂寥種抄」無地料紙題簽（一七・五糎×二・八糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色亀甲繫艶出表紙（二八・五糎×二〇・五糎）

遊紙・①二丁、②二丁

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二四・五糎

匡郭・四周单边（二四・五糎×一七・五糎）

墨付丁数・①二三〇丁、②七三丁

印記①一才「日本政府図書」「浅草文庫」、一三〇ウ「昌平坂学問所」「文

政庚寅」、②一才「日本政府図書」「浅草文庫」、七三ウ「昌平坂学問所」「文

政庚寅」

【刊年・刊行者】

②七三ウに跋文の年記が以下のとおりある。

「慶長第六辛丑丑孟冬初九 也足叟素然」

なお也足叟素然は公卿で和学者の中院通勝のこと。

同じく②七三ウに以下のとおり刊記あり。

「慶長九曆閏逢執除姑洗良辰／日東 洛陽 如庵宗乾刊行」

如庵宗乾については伝未詳であるが、宮川真弥氏は『湖月抄』『凡例』に記されている、北村季吟の源氏学の師「箕形如庵」と同一人物とする見方を示している（宮川真弥「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」『語文』一〇四号、二〇一五、同「北村季吟の源氏学（二）…附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 中』翻刻」『詞林』五八号、

二〇一五）。

【三三】『野槌』 江戸時代初期写 七冊

林羅山旧蔵 「請求番号：特一九一〇〇〇一」

本資料は林羅山の手による『徒然草』の注釈書『野槌』の自筆稿本である。上下巻七冊。

『野槌』は各章段においては儒教的合理主義の立場から天台宗および老荘思想を強く非難している点に特徴がある。和漢の書を引用し、博覧多識。本書の整理縮刷版『鉄槌』は、江戸時代を通じて広く流布した（鈴木久「野槌」『日本古典文学大辞典』）。

総評はおおむね前掲の『徒然草寿命院抄』を受けるが、『寿命院抄』が『徒然草』を一冊の書物として捉え、章段間の近接性・関連性を指摘するのに対し、『野槌』は各章段を個別に捉える。これは『寿命院抄』がそもそも各章段の区分を明確にした影響であると指摘される（久保田一弘「徒然草古注釈考——『徒然草寿命院抄』と『野槌』の比較を中心として（一）（二）『東洋大学大学院紀要…文学研究科〈国文学〉』五六〜七号、二〇二〇〜二一年）。また漢籍から類似例が多く引用され、作者である林羅山の知識・教養を披露する場になっているとの推測もある（島内裕子「徒然草古注釈書の方法『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」『放送大学研究年報』一八号、二〇〇一年）が、『寿命院抄』からの影響とみる向きもある。また、日本の儒学者として、和学を論じ、儒学の流布浸透を目指すという大局的な学問観の現れとする説もある（川平敏文「和学史上の林羅山——『野槌』論」『文学』一一一三号、二〇一〇年）。

本資料は林羅山自筆稿本で、羅山の蔵書印である「江雲渭樹」の印が見られる。林家からのち昌平坂学問所の所蔵となったことが蔵書印から推測される。

④水損あり。

【書誌】

外題・①「栴 榧 上之二」(※題簽一部欠)、②③④⑤⑥⑦「栴榧 上之二」(下之三)「左肩無地料紙題簽(一七・八糶×三・五糶)

内題・なし

表紙・栗皮表紙(二八・八糶×一九・七糶)

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二〇・五糶

匡郭・四周双辺(二〇・五糶×二六・七糶)・有界

墨付丁数・①二〇〇丁、②九二丁、③九八丁、④一一二丁、⑤八六丁、

⑥二〇〇丁、⑦八三丁

印記・①一才「林氏蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「江雲渭樹」、

一〇〇ウ「日本政府図書」「昌平坂学問所」

②③④⑤⑥⑦一才「林氏蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」、②③④⑤⑥⑦末尾「日

本政府図書」「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

奥書によれば林羅山の自筆稿本であるが、複数人の筆跡が混在しており、子弟の筆が混じっていることがわかる。自序によれば元和七年の成立で、羅山三九歳のときの仕事である。前掲『寿命院抄』刊行から数えると一七年后。

【二四】野槌 刊年不明 一三冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号：二〇三・〇一四六」

前掲資料『野槌』稿本を受けて出版された、刊年不明版本。上下巻二三冊。

本資料は寛永頃に刊行された初刻本に対し、慶安頃に再版された再刻本と推定される(川瀬一馬『新註国文学叢書 徒然草』講談社、一九五〇年)。

なお初刻本の伝本は極めて稀で、川瀬氏が高木文庫に一本をみとめた他は、吉沢貞人氏がその論考『栴榧』の板本について「『ぐんしよ』二五号、

一九九四年)の中で、蓬左文庫、尊経閣文庫、金沢市立図書館(現在の金沢市立玉川図書館)に所蔵されるのみと指摘している。流布したのは本資料の再刻本のほうで、『国文註釈全書』として明治期に活字化されたのも

この再刻本のほうである。初刻本とは版下の文字も組み方も異なる。また注の一部を増補、誤脱を訂正するなどの特徴が見られる(吉沢貞人『栴榧』

の板本について『ぐんしよ』二五号、一九九四年)。

各冊一丁目に「秘閣図書之章」の印が捺されていることから、紅葉山文庫の旧蔵であることがわかるが、上下逆さまに捺されてしまっている。

⑦⑧水損あり。

【書誌】

外題・「野槌 上二(下五)」左肩無地料紙題簽(一八・三糶×三・五糶)

内題・なし

表紙・代赭色卍字繫文様押表紙(二七・七糶×二〇・三糶)

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一八・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①五〇丁、②五一丁、③四三丁、④三七丁、⑤四二丁、⑥四二丁、⑦四五丁、⑧四九丁、⑨三九丁、⑩三八丁、⑪四七丁、⑫三八丁、⑬六九丁

印記・①～⑬一才「秘閣図書之章」「日本政府図書」、①～⑬末尾「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本資料には刊記の記載がないため、刊年・刊行者ともに不明。寛永年間後半の刊行か。

【二五】野槌 写年不明 一三冊

和学講談所旧蔵「請求番号：二〇三・〇一四七」

本資料は前掲『野槌』の写本である。上下巻一三冊。

各冊一丁目に「和学講談所」の蔵書印が捺してあることから、和学講談所の旧蔵だったことがわかる。全体的に書入れが目立つが、書写者については不明。

【書誌】

外題・①③⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬「野槌 上之一（下之五止）」左肩無地

料紙題簽（二〇・〇糎×四・〇糎）、②④「野槌 上之二（上之四）」左肩四

周双辺刷題簽（二七・〇糎×三・八糎）に墨書

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙（二六・〇糎×一八・八糎）

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①三四丁、②三五丁、③三二丁、④二六丁、⑤三二丁、⑥二七丁、⑦三三丁、⑧三九丁、⑨三〇丁、⑩二七丁、⑪三八丁、⑫二七丁、⑬六九丁

印記・①③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬一才「書籍館印」「日本政府図書」「内閣文庫」

「浅草文庫」「和学講談所」、末尾「内閣文庫」

②一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

⑤一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

三三ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たないため、写年・書写者ともに不明。

【二六】なくさみ草 慶安五年跋刊 八冊

和学講談所旧蔵「請求番号：二〇三・〇一三〇」

本資料は松永貞徳の手による『徒然草』の注釈書『なくさみ草』の手彩色絵入り版本。八巻八冊。

貞徳は中院通勝の『徒然草』講義を聴聞したことなどをきっかけとして、

自ら公開の場で『徒然草』を講じるようになり、門人の一人がこれを編集して本書の成立に至ったとされる（森川昭「なくさみ草」『日本古典文学』）

大辞典』。自跋によれば慶安五年の刊行で、貞徳八二歳のときである。

使用する本文は流布本系。語釈は概ね林羅山の『野槌』に従っているが、ほか『寿命院抄』『鉄槌』に拠るところが大きい(浅野日出男「なぐさみ草——『寿命院抄』『野槌』の受容①②」「山陽女子短期大学研究紀要」二二〜二三号、一九九五〜六年)大意には各章段の要旨のほか、故実についても載せる。最大の特徴は挿絵一五七図を掲載している点である。

『徒然草』に挿絵を付して出版したもので、本書が最初期のものに相当する。古典文学の版本において最も早く絵が添えられたのは、嵯峨本『伊勢物語』であるが、一部の図様が『なぐさみ草』に影響している。『なぐさみ草』の注釈内容に添うというより、絵だけで独立した文脈を持つとの指摘もある(朝木敏子「自律する挿絵…『なぐさみ草』の挿絵の世界」『国語国文』八〇・一一号、二〇一一年)。また同じ嵯峨本『二十四孝』の挿絵との共通点も指摘される(塩出貴美子「なぐさみ草」の挿絵について…『徒然草』の絵画化」『奈良大学大学院研究年報』一九号、二〇一四年)。江戸時代前期に多く製作された奈良絵本とも図様が共通するが、前後関係ははっきりしていない。しかし、『なぐさみ草』をもとに、多くの屏風や絵巻が作られてきたことはすでに指摘されている(島内裕子「描かれた徒然草」『放送大学研究年報』二三号、二〇〇四年)。

本資料の場合、「和学講談所」の蔵書印があることからみて和学講談所の旧蔵であることがわかる。それ以前の旧蔵者については「近」の印があるものの、詳細は不明。

【書誌】

外題・①「なぐさみ草 一」無地料紙題簽(一八・〇糎×四・三糎)に墨書、②④⑤⑦⑧「なぐさみ草 併貞徳大意 二(四・五・七・八)」無地料紙題簽(一八・二糎×四・〇糎)に墨書、③「なぐさみ草 三」紺色題簽(一六・五

糎×四・五糎)に朱書、⑥欠

内題・なし

表紙・縹色色表紙(二七・〇糎×一八・五糎)

遊紙・⑤和歌色紙(二二・二糎×一一・三糎)貼付「五月山ともしもれし小男鹿のあきはおもひに身をしほらん」、⑥和歌色紙(二二・二糎×一一・三糎)貼付「六月の空にいとひしうつせみの今は秋なる音をや鳴らん」、⑦和歌色紙(二二・〇糎×一一・二糎)貼付「七夕のあきのなぬかにしられにき丑ひかぬべきそらのけしきは」⑧和歌色紙(二二・一糎×一一・四糎)貼付「八重茂るむくらのかとにゆふ霧のかさねてとほる秋の山里」

料紙・楮紙

行数・本文…每半葉九行、頭注…每半葉一八行

字面高さ・二二・〇糎(うち頭注は八・〇糎)

匡郭・無辺無界

墨付丁数①七一丁、②五七丁、③六二丁、④六五丁、⑤四三丁、⑥四五丁、

⑦五三丁、⑧六四丁

印記・①⑧一才「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談祖」「日本政府図書

「内閣文庫」、各冊末尾「日本政府図書」「内閣文庫」、④⑤末尾「近」

【刊年・刊行者】

松永貞徳(長頭丸)の跋文に「慶安五壬辰曆 孟夏廿六日」の年記がある。刊記がないため、刊行者については不明。

【二七】徒然草古今大意 万治元年刊 四冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号…二〇三・〇一二二」

本資料は『徒然草』の注釈書である『徒然草古今大意』の万治元年版。

二卷四冊。

万治年間までに出版されていた注釈書である『寿命院抄』『野槌』『なぐさみ草』の三種の注釈を、章段毎に併記した点に特徴がある。『寿命院抄』は「立曰」、「野槌」は「道曰」、「なぐさみ草」は「貞曰」と記して注釈を載せるが、これはそれぞれの編者の号の一字に基づく『寿命院抄』は立安、『野槌』は道春、『なぐさみ草』は貞徳。

本文と頭注は掲載しない。序文は『野槌』の林羅山のものをそのまま用いている。

編者は不明。本文はふりがな付で平易に仕立てられており、それまでの注釈書を網羅できるという点でも読者の利便性を重視して編まれたものと推定される。

水損あり。

本資料には「昌平坂学問所」の墨印と「文化甲戌」の朱印が見られることから、文化二一年に昌平坂学問所に収められたことがわかる。

【書誌】

外題・①②③「徒然草古今大意 一（一三）」四周双辺刷題簽（一七・二一糎×三・四糎）、④「徒然草古今大意 四」無地料紙題簽（一六・八糎×二・八糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色卍字繫艶出表紙（二七・〇糎×一九・七糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二三行

字面高さ・二三・五糎

匡郭・四周単辺（二三・五糎×一七・〇糎）・無界

墨付丁数・①四四丁、②四一丁、③三五丁、④三四丁

印記・表紙「昌平坂学問所」、一才「日本政府図書」「浅草文庫」、各冊末尾「昌平坂学問所」「文化甲戌」

【刊年・刊行者】

④三四ウに以下のとおり刊記あり。

「万治元戊戌年 極月中旬 大和田九左衛門板行」

大和田九左衛門は京の書肆。同年に絵入り版『徒然草古今抄』を刊行している。

【二八】徒然草句解 寛文五年刊 七冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号：二〇三・〇一四」

本資料は高階楊順による『徒然草』の注釈書『徒然草句解』の寛文五年版。七卷七冊。

本文に対して小字双行で注釈を入れる。先行する注釈書類に従うが、自らの説に対しては「愚按するに」と記載。

編者の高階楊順については儒者である点以外については伝未詳。その立場からの解釈が多く、長らく本書は儒学的な注釈書であると評価されてきた。しかし実際には『源氏物語』『枕草子』や和歌などの平安文学を通して『徒然草』を理解しようという態度が目立つ。連続する章段に着目し、その照応を論じている点は本書の特徴といえる（島内裕子『徒然草句解』の注釈態度・卷之一を中心に）『放送大学研究年報』三二号、二〇一三年。

①朱書による付箋あり。

本資料は「秘閣図書之章」の印が捺されていることから、紅葉山文庫旧蔵であると推定される。

【書誌】

外題・①～⑦「徒然草句解 一（～七）」四周双辺刷題簽（一七・二糎×三・四糎）

内題・「徒然草句解」

表紙・縹色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一二・三糎

匡郭・四周単辺（二二・三糎×一七・〇糎）・無界

墨付丁数・①四三丁、②三四丁、③三六丁、④二九丁、⑤三六丁、⑥四二丁、

⑦四二丁

印記・各冊一才「秘閣図書之章」「日本政府図書」、各冊末尾「日本政府

図書」

【刊年・刊行者】

⑦四二ウに以下のとおり刊記あり。

「寛文五乙巳年孟秋吉祥日 風月庄左衛門開板」

風月庄左衛門は京の書肆で、二条通観音町に店を構えていたがのち二条通衣棚東南角に移っている。貞享二年『京羽二重』によれば、もとは儒医書を扱っていたようである。本姓澤田氏。

なお本書の初版は寛文元年。ほかに刊年不明版もある。

【二九】徒然草句解 寛文五年刊 六冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇一五」

本資料は前掲の『徒然草句解』の同版本であるが、第一冊目を欠き、全六冊。

「和学講談所」の朱印があることから、本資料は和学講談所の旧蔵であることがわかる。「末吉文庫」の朱印は、和学講談所以前の旧蔵者のものであると推定される。

【書誌】

外題・①⑦「徒然草句解 二 四周双辺刷題簽（一七・〇糎×三・七糎）

に墨書②欠、③④⑤「徒然草句解 四」（～六）」四周双辺刷題簽（一八・三糎×三・二糎）

内題・「徒然草句解」

表紙・紺色表紙（二六・〇糎×一九・〇糎）（※⑥裏表紙のみ代楮色表紙）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・四周単辺（二三・〇糎×一七・二糎）・無界

墨付丁数・①三三丁、②三六丁、③三九丁、④三六丁、⑤四〇丁、⑥

四〇丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」「末

吉文庫」（四・五糎×一・七糎）

吉文庫（四・五糎×一・七糎）

【刊年・刊行者】

⑦四二ウに以下のとおり刊記あり。

「寛文五乙巳年孟秋吉祥日 風月庄左衛門開板」

これにより前掲資料と同版であることがわかる。

【三〇】『鉄槌』 宝永三年刊 二冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇三・〇三二」

本資料は『徒然草』の注釈書『鉄槌』の宝永三年版。四卷二冊。

頭注に『野槌』の抜き書きを施して全四巻にまとめたもので、『野槌』のダイジェスト版といえる。内容について新奇性は見当たらないものの、読み易い本文を提供したという点においては画期的だった。その利便性から江戸時代を通して広く普及している（鈴木久「鉄槌」『日本古典文学大辞典』）。

編者は寛文一一年版『書籍目録』の記事によれば、青木宗胡という人物である。ただし伝未詳。これについて川平敏文氏はその論考の中で、島原藩の侍読伊藤栄治を本来の編者として挙げる（川平敏文『鉄槌』の編者——島原藩侍読伊藤栄治説——『国語国文』七一―八号、二〇〇二年）。伊藤栄治は京の人で、神道学者・歌学者・有職学者。知恩院初代門跡良純法親王に学んだ。のち播磨姫路藩主榊原忠次に召し抱えられ、その没してのちには肥前島原藩主松平忠房に仕えた。貞享二年没（川平敏文「伊藤栄治——ある歌学者の生涯」『雅俗』九号、二〇〇二年）。

初版は慶安元年。ほか慶安二年版、明暦三年版、寛文九年版、正徳四年版、寛文十二年版、延宝七年版、宝永三年版など、版種はかなり多い。小松操氏は「徒然草鉄槌考略」（『金沢文庫研究』九号、一九六三年）の中で、本資料を「第八種本 ハ 宝永三年刊出雲寺板」と分類し、他資料の比較から書肆名を出雲寺和泉掾としている。なお、これを受けて川平敏文氏は

先に挙げた論考『鉄槌』の編者——島原藩侍読伊藤栄治説——の中で「第七種本 ハ」に分類しなおしている。

刊行当時は四卷四冊だったものを、本資料の場合は合冊して四卷二冊。「太政官文庫」の印から内務省の旧蔵だったことがわかるが、「三河屋」という墨印も見え、もとは貸本屋の所蔵だったことが推定される。

①八三ウに付箋あり。

全体的に水損が目立ち、特に表紙の状態が悪い。題簽についてもほとんど破れていて、外題がかるうじて読める程度。

【書誌】

外題・二〇板 鉄槌 上之一（下之二）「四周双边刷題簽（一七・〇糎×三・三糎）」

内題・なし

表紙・紺色表紙（二六・三糎×一九・五糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・本文（二三・〇糎）、頭注（八・五錢七）

匡郭・四周单边（二三・五糎×一七・二糎）

墨付丁数・①九六丁、②七八丁

印記・各冊一オ「山／三河屋」「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」、各冊末尾「山／三河屋」「大日本帝国図書印」「太政官文庫」

「日本政府図書」

「刊年・刊行者」

②七八オ「宝永三丙戌年／正月吉日」とある。出雲寺和泉掾から刊行された版をもとに、書肆名を落としたもの。

印記・各冊一才「日本政府図書、各冊末尾「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

⑤五二ウに以下のとおり刊記あり。

「貞享二乙丑曆一月吉旦 洛陽錦小路 永田長兵衛開板」

永田長兵衛は京の書肆で、貞享二年当時は錦小路通新町西入に店を構えていた（のち花屋町通に移転）。屋号を丁子屋。祖を佐々木道蒼と称する。

【三三】徒然草文段抄 寛文七年刊 七冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇三・〇二一六」

本資料は北村季吟による『徒然草』の注釈書『徒然草文段抄』の寛文七年版。七巻七冊。

松永貞徳の講釈をもとに段を区分し、さらに節に分けて注釈を付しているのが特徴で、書名の由来ともなっている。『寿命院抄』『野槌』など先行する注釈を踏まえた上で、それまで儒仏の観点から論じられていた徒然草観を排し、伝統的な歌学者として和歌の世界から批評を加えている（鈴木久「徒然草文段抄」『日本古典文学大辞典』）。

林羅山が『野槌』において、儒者としての思想的観点から内容に批判を加えているのに対し、季吟は自らの価値観は極力排除し、原文の意味を詳しく説明するに留める。羅山の注には牽強付会、荒唐無稽ともいえる部分があり、季吟はこれらを削ぎ落とし、近代にまで通じる注釈を作り上げている点からも、近代的研究方法を先取りしていると評価することができ（島内裕子「徒然草の享受・影響 徒然草注釈書の世界——近世以降」『国文学…解釈と鑑賞』六二・一一号、一九九七年）。

なお本資料は初版に相当する寛文七年版である。ほか享保二年版、刊年不明版などの存在が知られる。

「大日本帝国図書印」「太政官文庫」等の印記からは、内務省以前の旧蔵者には遡ることができない。

【書誌】

外題・「徒然草文段抄 一（一六）」左肩四周双边刷題簽（一八・五糎×四・〇糎）

内題・「徒然草文段抄」

表紙・浅葱色表紙（二七・二糎×一九・五糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一四行

字面高さ・二・六糎

匡郭・四周单边（二・六糎×一七・〇糎）

墨付丁数・①五二丁、②六〇丁、③六一丁、④六八丁、⑤五三丁、⑥五三丁、

⑦四九丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」、各冊末尾「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

⑦四九ウに以下のとおり刊記あり。

「寛文七年十二月吉日」

書肆については不明。

【三四】徒然草嫌評判 寛文二二年刊 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇二一九」

本資料は『徒然草』の論難書『徒然草嫌評判』の寛文一二年版。二巻二冊を合冊して一冊。注釈書というよりは、『徒然草』を題材とした仮名草子に連なるものとする見方がより穏当といえよう（入口敦志「評判するということ」『語文研究』八六・八七号、一九九九年）。

『徒然草』に対し、痛烈な批判を加えている点の特徴。仏教者の立場から儒教的な解釈を難じており、『徒然草』を直接批判するというよりは、儒教的性格の色濃い『野槌』およびその編者林羅山を批判しているといえる。本書が出版された寛文年間には「評判」の体裁を取ったものが数多く出版され、また同時に儒仏論争の流行が見られる時期でもある。これらの流行に合致する本書は、すでに寛永年間には成立していたと見られるが、寛文年間に入ってから「再発見」されたと推定される（川平敏文「特集 論争の文学 徒然草をめぐる儒仏論争―江戸前期文芸思潮」『斑』『雅俗』八号、二〇〇一年）。

長らく『徒然草』は称揚されてきたため、本書についてはただの悪口とすら見做され、低く評価されてきた。しかし本書は部分的に兼好法師に賛同する箇所も見られるし、また新しい解釈を述べている箇所もあり、再評価が待たれる（杉浦清志『徒然草嫌評判』は使えるか『日本文学』五二一・四号、二〇〇三年）。

本資料は「和学講談所」の朱印が見られることから、和学講談所の旧蔵であることがわかる。

水損あり。袋綴が開いている箇所もある。

【書誌】

外題・「徒然草評判」左肩四周双边刷題簽（一七〇糶×三・八糶）

内題・「徒然草嫌評判」

表紙・紺色表紙（二六・八糶×一九・〇糶）

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・二〇・五糶

匡郭・四周单边（二〇・五糶×一六・〇糶）

墨付丁数・八七丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

【刊年・刊行者】

八七ウに刊記あり。

「寛文壬子十二年中秋上旬」

【三五】徒然草参考 延宝六年刊 八冊

内務省旧蔵 [請求番号：二〇三・〇二二]

本資料は『徒然草』の注釈書『徒然草参考』の延宝六年版。八巻八冊。

重版されなかつたと見え、初版に相当する延宝六年版のみ伝来する。部編者の恵空は天台宗の僧で、『徒然草』に見える天台宗の影響を見て取っているのが本書の特徴である。

恵空は紀州浄福寺の僧で、寛永二〇年生まれと推測され、本書の出版時には三五歳。延宝二年から『徒然草』の講釈を始め、その内容をまとめたのが本書に相当する。本書のほか、著作は多く、『節用集大全』『法音抄』などが知られる（中田祝夫「紀州浄福寺恵空という学僧について―徒然草参考・節用集大全・法音抄等の著者」永山勇博士退官記念会編『国語国文学論集』風間書房、一九七四年）。

本資料は明治二二年に内務省によって購入された。各冊一才に捺されて

いる蔵書印「智勝書蔵」の印主が内務省以前の旧蔵者と推測されるが、詳細は不明。

【書誌】

外題・①欠、②～⑦「徒然草参考 二（～七）」左肩四周双辺刷題簽（一八・五糎×四・〇糎）、⑧左肩打付墨書

内題・「徒然草参考」

表紙・紺色表紙（二六・五糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・（頭注）四・〇糎（本文）一八・七糎

匡郭・四周単辺（二二・六糎×一六・六糎）

墨付丁数・①四七丁、②四八丁、③四六丁、④四五丁、⑤二〇丁、⑥五六丁、

⑦五三丁、⑧五六丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」「智勝書蔵」、各冊末尾「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

⑧五六ウに以下のとおり刊記あり。

「延宝六年戊午初冬吉辰／押小路御幸町西口入町／西村七郎衛門未正／同七郎兵衛正光／開板」

【三六】真字寂寞草 元禄二年刊 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇二六」

本資料は『徒然草』を漢訳した『真字寂寞草』の元禄二年版。本来は二

卷六冊だが、本資料の場合は合冊して二卷二冊。本資料と同じ元禄二年版のほかは伝来を見ない。

本書は『伊勢物語』の漢訳『真字伊勢物語』を模して成立した。『徒然草』の本文をすべて漢文に置き換え、頭注にその訳文の根拠を示す。

編者は岡西惟中。談林俳諧の俳人として知られるが、俳論書を数多く記して新風派の俳諧を広めた論客として特に名高い。幼少期から和漢の古典にも通じ、本書刊行ののち『徒然草』の注釈書『徒然草直解』（貞享五年刊）も編んでいる（米谷巖「惟中」『日本古典文学大辞典』）。

本書の登場以降も『徒然草』は江戸時代を通して漢訳された。その理由としては、簡潔な章段の扱いやすさ、漢籍に大きな影響を受けて成立したというその親和性などが指摘されている（川平敏文「江戸のコンポジション 徒然草の漢訳」『文彩』六号、二〇〇五年）。そもそも当て字や造語も多く、擬古的・戯作的な性格を有している（山田俊雄「真名本」『国語学大辞典』東京堂出版、一九八〇年）。

本資料には「和学講談所」の印が捺されており、和学講談所旧蔵であることがわかる。第一冊目一才右下に和学講談所以前の旧蔵者のものと思われる朱印があるが、朱で塗りつぶされてしまっており、判読できない。

【書誌】

外題・「真字寂寞草 上（下）」

内題・「真字寂寞草」

表紙・香色布目型押表紙（二六・〇糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周単辺（二二・〇糎×一六・五糎）

墨付丁数・①八〇丁、②六一丁

印記・①一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」判
読不明朱印(四・〇糎×三・〇糎)、②一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅
草文庫」「和学講談所」

【刊年・刊行者】

②六一ウの刊記は以下のとおり。

元禄二己巳歳正月吉祥日／江戸日本橋／松葉清兵衛／京二条通／山崎
屋市兵衛／大坂伏見呉服町／深江屋太郎兵衛刊板」

松葉清兵衛は江戸日本橋の書肆である萬屋清兵衛のこと。元禄二年当時
は萬町中通角に店を構えていた。西鶴本や八文字屋本の江戸販売を行って
いたことで知られる。山崎屋市兵衛は京御幸町二条下ルに店を構えていた
書肆で、西鶴の『男色大鑑』の版元。深江屋太郎兵衛は大坂伏見呉服町淀
屋橋筋角に店を構えていた。

【三七】真字寂寛草 元禄二年刊 六冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇三・〇二八」

本資料は前掲『真字寂寛草』の同版。二巻六冊。

本資料は明治一三年に内務省によって購入された。第二冊目と第六冊目
の見返しに「東溪」の朱印あり。また各冊一才に「上毛桐生街／長澤仁右衛門」
の印が見られる。これらが内務省以前の旧蔵者の印であると考えられる。

【書誌】

外題・「つれく草 一(二下・二三・欠・四) 左肩打付墨書
内題・「真字寂寛草」

表紙・香色檀紙地砂子散し表紙(二七・八糎×一八・八糎)

見返し・②③⑥横型楕円朱印「東溪」(二・五糎×三・二糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周单边(二二・〇糎×一六・五糎)

墨付丁数・①三二丁、②一八丁、③三四丁、④一三丁、⑤三〇丁、⑥

一五丁

印記各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」「上
毛桐生街／長澤仁右衛門」、各冊末尾「大日本帝国図書印」「日本政府図書」、

②⑤⑥一才縦型長方陰刻朱印(二・〇糎×一・五糎)

【刊年・刊行者】

⑥一五ウに前掲と同じ刊記あり。

【三八】つれくの讚 宝永八年跋刊 八冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇二五」

本資料は各務支考の手による『徒然草』の注釈書『つれつれの讚』で、
宝永八年の年記を持つ跋文が載る。八巻八冊。首巻を欠く。

本書は、文章上の技巧や構成について詳述し、教訓書・歌学書として解
釈することを誤りとして、文芸書としての解釈を論じる点に特色がある(森
川昭「つれつれの讚」『日本古典文学大辞典』)。先行する注釈に批判を加え、
それまでの注釈とは一線を画すべく、「注」「辨」「讚」の三部構成とし、そ
れぞれの項目で先行研究を論じ、補強し、文芸性を讃える内容となっている。

支考の序文によれば、師の芭蕉と『徒然草』を論じたことがあり、元禄七年に起筆したという。跋文は門人の渡部狂という人物によるもので、支考没後に遺稿を出版することになったとあるが、狂は支考の変名なので、跋文の内容はあくまでも支考の伴死である。「狂」は『徒然草』の冒頭にも記されており、支考はこの「狂」を『徒然草』の本質と見て取った(川平敏文「元禄―享保期の徒然草注釈―兼好発憤説と述志の文学―」『語文研究』八一号、一九九六年)。

「徒然草を純粋な文芸として捉え、徒然草から道徳性のかげらをも見出そうとしない徒然草観そのものが、これ迄の徒然草観を大きく覆す、およそ破天荒な読みであったと言える」と評される(川平敏文「特集 元禄以後、享保以前 舌耕徒然草―『諸抄大成』以後諸注釈の展開―『雅俗』二号、一九九五年)。

本資料は各冊第一丁目に「和学講談所」の朱印があることから、和学講談所の旧蔵であることがわかる。

【書誌】

- 外題・①「徒然草讚」左肩無地料紙題簽(二八・五糎×三・五糎)、②④⑤
⑥⑦⑧「つれづれ讚 二(四〇八)」左肩無地料紙題簽(一九・〇糎×四・〇糎)、
③欠

内題・「つれづれの讚」

表紙・縹色表紙(二五・五糎×一八・五糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉二三行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①二六丁、②三五丁、③三三丁、④四五丁、⑤四二丁、⑥二〇丁、

- ⑦三三丁、⑧二九丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文库」「和学講談所」

【刊年・刊行者】

⑧二九才の跋文に「宝永辛卯十月日」の年記があり、宝永八年から間もなくの出版であることが推測される。⑧二九ウに書肆の記載あり。

「書林／醒井五条上 風月五郎左衛門／寺町綾小路下 小川久兵衛」
いずれも京の書肆。小川久兵衛は号を雲松軒、西川祐信の絵本を多く扱っていたことで知られる。

- 【三九】 つれづれの讚 宝永八年跋刊 三冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇三・〇一二七」

本資料は前掲資料「つれづれの讚」の同版だが、版元を変えて出版されたもの。合冊されて八卷三冊。

明治一三年に内務省によって購入された。①一才右肩に内務省以前の旧蔵者のものと思われる縦型碯円陽刻朱印あり。

【書誌】

外題・①②③「徒然草讚 従序(〜従六／至八)」「(一九・二糎×二・八糎)

内題・「つれづれの讚」

表紙・錫色布目型押表紙(二六・三糎×一九・三糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉二三行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①九一丁、②二二三丁、③八四丁

印記・各冊一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」
縦型積田陽刻朱印（三・八糎×二・〇糎）

【刊年・刊行者】

宝永八年の年記を持つ跋文は、前掲資料に同じ。ただし③八三ウ記載の
書肆名は前掲資料と異なっている。

「書林／京都寺町押小路上ル町 柏屋勘右衛門／同 勘九郎／開板」

柏屋勘右衛門は、号を広徳堂、本姓を山岡氏。寛永年間頃から活動を始
めている。柏屋勘九郎については、本書の出版のほか知られていない。

③八四丁目は、柏屋勘右衛門の広告が載る。

【四〇】徒然草明汗稿 正徳六年序刊 五冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇二二〇」

本資料は高屋近文による『徒然草』の注釈書『徒然草明汗稿』の正徳六
年序刊本。五卷五冊。改題本に『徒然草奥義抄』。

編者の高屋近文は垂加神道の流れを汲む学者で、その視点から厳しい批
判を加えているのが本書の特徴である。儒教・仏教・老荘思想を背景に、『源
氏物語』や『枕草子』などの平安文学にも言及するのが『徒然草』の特徴
だが、それについてすべては虚飾であり、「金に似た真鍮」のようなもの
と論難する。学者が注釈をつけるほどの名著とはいえないというのがその
主張で、これは当時の儒者たちに大いに歓迎されたく、山崎美成の『海
録』巻九にも、「なぐさみ書の反古」のような書であるのに、称揚する人
が多く「人道の害」にもなる可能性が出てきたので、本書は生まれたとあ
る（大坪利絹『明汗稿徒然草奥義抄』（一）翻刻と解説』『親和女子大学

研究論叢』一九号、一九八六年）。

高屋近文は土佐出身の神道学者。『諸社伝』『神道啓蒙』『神拝次第』な
どの著作がある。享保四年に三九歳で没した。

本資料の各冊一丁目に「和学講談所」の朱印が捺されていることから、
本資料が和学講談所の旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題①④⑤「徒然草明汗稿 一（四・五）左肩四周双辺刷題簽（一八・〇
糎×三・五糎）、②③欠

内題・「徒然草明汗稿」

表紙・代赭色表紙（二六・三糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①四三丁、②四二丁、③四一丁、④四〇丁、⑤三七丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

【刊年・刊行者】

刊年・刊行者ともに未詳。序文の年記①（二才）に「正徳六年丙申三月下旬」
の年記が見える。

【四一】徒然草評論 天保七年写 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇二二四」

本資料は田安宗武による『徒然草』の注釈書『徒然草評論』を、天保七

年に伴直方が書写したもの。一卷一冊。

田安宗武は徳川吉宗の次男に当たり、御三卿田安家の祖として知られるが、歌人・国学者としても多くの業績を残す。特に国学に関しては、荷田在満や賀茂真淵との交流を通じて、量質を備えた大きな研究成果を残している（藤平春男「田安宗武」『日本古典文学大辞典』）。本書のほか、主な注釈としては『古事記』『伊勢物語』『小倉百人一首』などを手掛ける。

なお本書の成立年代についてははっきりしないが、草稿が国文学研究資料館に所蔵されている。本資料はその草稿本からの忠実な模写で、末尾（四九ウ）に「天保七年四月廿七日書写畢 伴直方」の奥書が認められる。本文冒頭部分（一オ）右下に、「伴氏家印」の朱印がみられることも含め、本資料は伴直方の筆跡を残すものと考えてよい。

伴直方は、賀茂真淵の流れを汲む国学者で、天保一三年に五三歳で没した。物語・絵巻物・歌学の考証のほか、かな・国字・かなづかいなど語学に関する著作が多い（古田東朔「伴直方」『日本古典文学大辞典』）。

本資料は「伴氏家印」の印があることから、伴氏旧蔵であるとわかる。また末尾（四九ウ）に「昌平坂学問所」の墨印に合わせ、「元治乙丑」の朱印があることから見て、元治二年に昌平坂学問所に新収されたことがわかる。

【書誌】

外題・「徒然草評論 全」左肩四周双边刷題簽（二五・五糎×三・八糎）に

墨書

内題・「徒然草評論」

表紙・紺色表紙（二三・五糎×一六・五糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉六行

字面高さ・

匡郭・無辺無界

墨付丁数・四九丁

印記・表紙「昌平坂学問所、一オ」日本政府図書「浅草文庫」「伴氏家印」、四九ウ「昌平坂学問所」「元治乙丑」

【写年・書写者】

先に述べた通り、末尾（四九ウ）に「天保七年四月廿七日書写畢 伴直方」の奥書が認められる。本文冒頭部分（一オ）右下に、「伴氏家印」の朱印がみられることも含め、本資料は伴直方の筆跡を残すものと考えてよい。

【四二】つれつれのでん 写年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇三・〇一一八」

本資料は『徒然草』の注釈書『つれつれのでん』の写本。一卷一冊。

『徒然草』における難解な語・場面について抜き出し、論注を加えたもの。書名から推測するに、秘伝として扱われてきた口伝を書写したものか。墨付丁数がわずか一〇丁であることから見ても、何らかの抜粋と考えたほうが良いと思われる。

本資料は、第二丁目に「昌平坂学問所」の墨印が見られることから、昌平坂学問所の旧蔵であることがわかる。

水損・虫損あり。

【書誌】

外題・「徒然伝」左肩打付墨書

内題・「つれつれのでん」

表紙・代赭色表紙（二六・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉七行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一〇丁

印記・一才「日本政府図書」「大学校図書之印」「浅草文庫」「昌平坂学問所」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たず、写年・書写者ともに未詳。

【四三】都手振 文化六年刊 一冊

太政官正院地誌課・地理寮地誌課・内務省地理局旧蔵

〔請求番号：二〇四・〇一八五〕

本資料は石川雅望による随筆『都のてぶり』の文化六年版。一冊。

江戸における特色の強い場所を取り上げ、その風俗を雅文体で綴った短編集。「とみ沢の市」「両国の橋」「ばくろの町」「やくし堂」「よたか」の五編から成る。中でも「ばくろの町」は、日本橋馬喰町の旅宿を舞台に、旅人たちの様子を描いたもので、石川雅望自身が旅籠屋であった経験を踏まえているもの（粕谷宏紀「都のてぶり」『日本古典文学大辞典』）。

石川雅望は国学者で狂歌師。狂名を宿屋飯盛。大田南畝らとともに天明期の狂歌壇を牽引した。「とみ沢の市」「ばくろの町」は大田南畝が主催した「和文の会」に参加した折の作品である（稲田篤信『都の手ぶり』考）森山重雄編『日本文学・始源から現代へ』一九七八年）。

本資料には「地誌備用図籍之記」の印がみられることから、太政官正院地誌課・地理寮地誌課・内務省地理局の旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題・「都の手ぶり」左肩縹色題簽（一九・四糎）

内題・「都手振」

表紙・柿色表紙（二七・〇糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二一行

字面高さ・一八・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・二九丁

印記・一才「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

二九ウに以下のとおり刊記あり。

「文化六年己巳五月／東都／麹町平川丁式丁目／角丸屋甚助梓」

角丸屋甚助は江戸の書物問屋で、号を衆星閣。石川雅望の著作のほか、葛飾北斎の絵本などを手掛けている。本資料の二五才〜二八ウまで広告を載せる。

【四四】「花月双帯」 写年不明 四冊

昌平坂学問所旧蔵 〔請求番号：特〇六一・〇〇〇二〕

本資料は松平定信による随筆『花月双紙』の自筆稿本。六卷六冊のほすが、一部を欠いて三卷四冊。

陸奥国白河藩主で、老中として寛政の幕政改革を行った松平定信が、隠居後に綴った雅文体の随筆で、「花の事」「月の事」で始まることからこの書名がある。他にも「神仏の事」「学問の事」「夫婦の道」「老衰の事」など、さまざまな事柄について記す。

松平定信は、前掲『徒然草評論』の著者でもある田安宗武の実子で、徳川吉宗には孫に当たる。白河藩主松平定邦の養子となり、天明三年に藩主となった。天明七年には老中首座となり、財政の緊縮、大奥の抑制、海防の強化、人材の登用など諸改革（寛政の改革）を主導したことで知られる。天理図書館に残欠稿本が所蔵されており、推敲の跡が見て取れる。刊本もあるが、市中での出版ではなく、藩中の下士に命じて作らせた私家蔵本で、こちらにも改刻の跡がある（木村三四吾「花月双紙」『日本古典文学大辞典』）。

本資料には文化二三年の識語があるため、書写されたのもその時期から遠く離れないと思われる。『花月日記』には、文政元年に清書したとの記述が見えることから、文化九年の隠居後に着稿し、文政元年に成稿したものであるろう。

本資料は一才に「昌平坂学問所」の墨印がみられることから、昌平坂学問所旧蔵であることがわかる。

紺色の帙（二〇・五糎×一七・五糎×二・〇糎）入り。左肩の四周双辺刷題簽（一七・三糎×二・七糎）に「花月草紙 松平樂翁自筆稿本 四冊」とある。

【書誌】

外題・①③欠、②④「花月双昏 二(四)」左肩薄紅色題簽（一六・五糎×三・九糎）に墨書
内題・なし

見返し・裏見返しに丁数記載の付箋あり。「内閣文庫」の認印が捺されている。

表紙・砥粉色地縹色切紙散表紙（二四・〇糎×一七・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉七行

字面高さ・一八・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①三六丁、②三三丁、③五〇丁、④三六丁

印記・①④一才「昌平坂学問所」「日本政府図書」「大学校図書之印」「内閣文庫」、①三六ウ「昌平坂学問所」「内閣文庫」、②④末尾「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は先に述べたとおり、識語によれば文化二三年ごろ、松平定信の筆で記されたものであることがわかる。

【四五】花月双昏 刊年不明 六冊

本資料は前掲『花月双紙』の刊年不明版。六卷六冊。

先に述べたように文政元年に成稿したあと、藩中の下士に命じて出版させた私家蔵本である。出版後も改刻されており、数種類の版がある。なお自筆版下。

本資料は表紙に「昌平坂」の墨印と、昌平坂学問所で使用されていた分類用の印「番外書冊」と「漫筆雑考」の付箋が認められる。末尾には「昌平坂」の墨印とともに、「安政戊午」の朱印が捺されていることから、安政五年に昌平坂学問所に新収されたものであることがわかる。

裏見返しには前掲の自筆本と同じ、丁数を記した付箋が貼られており、「内閣文庫」の認印が捺されている。

【書誌】

外題・「花月草帚」左肩無地料紙題簽（二六・五糎×三・五糎）に墨書
内題・花月双帚

見返し・裏見返しに丁数記載の付箋あり。「内閣文庫」の認印が捺されている。

表紙・紺色表紙（二五・三糎×一七・八糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉七行

字面高さ・一九・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①五九丁、②四四丁、③四五丁、④四四丁、⑤五五丁、⑥四八丁

印記・各冊表紙「番外書冊」「昌平坂」、各冊一才「大学蔵書」「日本政府図書」

「浅草文庫」「内閣文庫」、各冊末尾「安政戊午」「昌平坂」「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を持たないため、正確な刊年は不明。成稿の文政元年以降の出版である。

【四六】関の秋風 写年不明 一冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一八二」

本資料は松平定信による随筆『関の秋風』の写本。全一冊。

白河藩領内の方言や風習などの風俗、気候や風景などの情景、また社会情勢による感想などを四五章にまとめたもの。安永四年に白河へ入った際の見聞に基づく記述で、田内月堂による『守国公著述目録』によれば、白河入りを案じた実姉のために、白河の様子を記したものであるようだ（朝倉治彦「関の秋風」『日本古典文学大辞典』）。

奥書によれば天明五年二月の成稿。
本資料は明治一二年に内務省が購入したものである。

【書誌】

外題・「関の秋風」左肩四周双辺刷題簽（二七・〇糎×三・三糎）に墨書
内題・「関の秋風」

表紙・代楮色布目型押表紙（二六・五糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・三〇丁

印記・一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「明治十二年購求」、二九ウ「内閣文庫」、三〇ウ「日本政府図書」「大日本帝国図書之印」

【写年・書写者】

三〇才に以下のとおり奥書がある。

「于時天保十一季子正月何某之所持之書借写之／野口蔵」

元奥書と見られ、本資料は天保一一年以降の書写とするのが妥当であろう。

【四七】薬力太平記 写年不明 一冊

医学館旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇九三」

本資料は、生薬や薬効をめぐる逸話を、『太平記』などの軍記物語風の読み物に仕立てたもの。本来であれば戯作と呼ぶべき資料であるが、分類しかねて「随筆」の項目に立てられたと思われる。三巻二冊。

本資料は「医学図書」「躋寿殿書籍記」「多紀氏蔵書印」の朱印が見られることから、もともと多紀家に所蔵されていたものが医学館に入ったことがわかる。天明から文政期に捺印されたことが推定できる（『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』。戯作めいた本資料が医学館で資料として所蔵されていた点は興味深い。なお、『国書総目録』によれば、本資料の存在は当館以外に知られていない。

【書誌】

外題・「薬力太平記」左肩打付書

内題・「薬力太平記」

表紙・香色表紙（二三・五糎×二六・四糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二三行

字面高さ・二〇・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・七行

印記・一才「医学図書」「躋寿殿書籍記」「多紀氏蔵書印」「内閣文庫」「日本政府図書」、七ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たないため、写年・書写者ともに未詳。

【四八】阿奈遠可志 写年不明 一冊

旧蔵者不明 「請求番号：二〇四・〇一六七」

本資料は沢田名垂の手による春本『阿奈遠可志』の写本。上下二巻。本書は、和文を駆使し、さまざまな古典文学から広範に引用し、エロスを覆い隠しているが、まさに春本と呼ぶべき資料で、前掲資料同様、分類しかねて「随筆」の項目に置かれたものと推測する。

書名の「阿奈遠可志」は、平安時代の感嘆詞「あな」と、「情趣がある」を意味する「をかし」を組み合わせたものであるが、「あな」は女性器の隠喩でもある。例えば上巻第一話は肛門と陰門を、隣同士の男女に擬人化し、男根の隠喩である「法師」を登場させる。『源氏物語』を思わせる典雅さに、江戸の笑い咄めいた発想を交え、一つの作品として成立させている（スミエ・ジョーンズ「雅文とポルノグラフィ——澤田名垂の『阿名遠可志』『文学』一〇一三号、一九九九年）。

沢田名垂は江戸時代後期の陸奥国会津藩士。藩の和学師範安部井武氏に二条派の和歌を学び、のち京都芝山大納言持豊の門に入り、その奥義を極めた。『国史大辞典』は「会津藩最高の歌人」と評価する。藩校日新館で和歌を教え、『日新館童子訓』の制定、『新編会津風土記』編集に従う。文化二年には和歌師範となり、また和歌を藩主に侍詠している。弘化二年、七十一歳で没した（山口孝平「沢田名垂」『国史大辞典』）。

本書は明治以降「江戸三天奇書」の一つに挙げられていた。明治時代には、歌人として名を馳せた大学者が春本に手を染めるのは奇異に感じられていたであろう。ただし、江戸時代を通してみると、それほど珍しいことではない。

本資料には蔵書印が見当たらないため、旧蔵者については未詳。写本で

のみ伝えられている点は、規制を憚ったためと思われるが、蔵書印の捺印がないのも摘発を恐れたのかもしれない。

【書誌】

外題・「阿奈遠可志」左肩四周双边刷題簽（一四・〇糎×三・一糎）に墨書
内題・「阿奈遠可志」

表紙・紺色表紙（二二・五糎×一五・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一六・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・五八丁

印記・一才「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たないため、写年・書写者ともに未詳。

（調査員）